キーワード
【歴史・遺産】
History and Heritage

車で自宅と船着き場を行き来する時代になっても残したい風景があります。それは懐かしいだけでなく、「生き方」を教えるためのものなのです。

ムラで生きた証しを伝えるために

村の中心部から北東に五キロの机地区。ここに田野畑村の原風景ともいうべき「机浜番屋群」があります。

海から吹き付ける強い風に耐え、寄り添い立ち並ぶ小さな木造番屋は全部で24棟。ところどころ錆び付いたトタン屋根や雨風に色あせた木の壁、積み上げられた古い延縄が、この地を流れた時間の長さを物語っています。

ほんの数年前まで、ここは漁港や交通の発達の陰で役目を終え、消えていく運命にありました。しかし今は地域活性のメインステージとして注目を集めています。

きっかけは、平成14年2月に実施された地域の宝探し「たのはた元学」。それまで「古くて見苦しい」とマイナスイメージで捉えられていた番屋群に、村外参加者から「漁村の原風景だ」と称賛の声が寄せられたことで保存活動への機運が高まりました。

活動の牽引役は、村でも外部の有識者でもなく、地元机地区の若者で組織される「机郷友クラブ」。昭和52年、郷土を愛し友を大切にしながら「明るく住みよい郷土の建設のために貢献すること」をモットーに設立され、地域の各種行事の主催や協賛、奉仕活動を行ってきた人々です。

最初に行われたのは測量と番屋の持ち主からの聞き取り調査。机浜の場合、住居は昭和8年の三陸大津波を機に高台に建てられたため、番屋は漁具の収納やワカメ、コンブの乾燥作業場など「納屋」として利用されると同時に、漁期には寝泊まりする場所でした。これは親方の住居と漁夫の宿泊施設を兼ねていた北海道西岸の「鰊(ニシン)番屋」などとは性格の違う、田野畑ならではの形態。また番屋群の一角にある「漁協若布集荷倉庫」は昭和35年に地区の漁師たちが力を合わせて建てたもので、机浜の人々の強い絆と助け合いの精神を象徴する存在でした。

建物の保存だけではなく、先人が築き上げた協働の精神も伝えよう―。そんなクラブの熱意は周囲にも伝わり、保存活動は多くの人々の支援で進められていきました。調査結果を記した番屋マップと看板の作製に始まり、平成17年には番屋を利用して漁具や磯船を展示した資料館ができ、同年11月には会員の悲願だったモデル番屋も完成しました。風景の中に溶け込むようにと昔ながらの石置きクリ柾葺き屋根で造られた建物は、会員はもちろん地域住民、村外の人々の協力で実現したものです。

平成18年、机浜番屋群は水産庁の「未来に残したい漁業漁村の歴史文化財百選」に選ばれました。現在は、村の進める「体験・滞在型観光」の拠点となっています。

また、三閉伊一揆をはじめ、大宮神楽、菅窪鹿踊・剣舞、甲地鹿踊など、先人の築きあげてきた民俗文化や地域伝統文化について、村民の郷土に対する理解を深めるとともに、これらの掘り起こしや伝承活動に努めています。

4年前の「たのはた元学」で見つけられた地域の宝は、村全体で539個もありました。机地区の青年活動が結果として地域の活性化に結びついたように、これら宝をどう活用するかが、村の未来を切り拓く鍵のひとつです。

1【机浜番屋】
昭和の漁村風景を今に伝える机浜の番屋群。これだけの数が集中して残っている場所は、全国的に見ても貴重
2 3往事の賑わいはないものの今も現役で使われている番屋もあります
4クラブの活動拠点そして地域活性のシンボルとして、活用法が模索されています

【三閉伊一揆像】「三閉伊一揆」と呼ばれるわが国最大級の農民一揆が起きたのは、今から約150年前のこと。 田野畑村の指導者らにより導かれ、歴史に深く刻み込まれる大きなうねりを巻き起こしました

【田野畑村民俗資料館】国内最大級といわれる三閉伊一揆についての資料を中心に収蔵する全国でも珍しい資料館。また村内の遺跡から出土した縄文時代の土偶なども展示しています

【菅窪鹿踊】本物の鹿を模した鹿踊は、田野畑と四国宇和島だけ。県指定無形文化財の貴重な芸能

【大宮神楽】三拍子のリズムは荒々しく、舞いも勇壮かつダイナミック。家々を巡業する神楽

【舘石野列石遺構】縄文時代中期末～後期前半のものと推定され、環状列石とは異なり線状に延びる大列石は類例がなく極めて貴重であると、平成9年県の史跡に指定されました（浜岩泉）